

キヤルちゃんの 人格排泄ショー♡

「ちよっと！一体何のつもり!？」

(クソ…身体が動かない!こんな初歩的な魔法にかかるなんて…下手こいたわ…)

「いやあー、元陛下の側近であるキヤルちゃんにちよっと興味があつてねえ。どんな才能の持ち主かと思つて楽しみにしていたけどまさかこんな魔法にまんまとかかつてしまうとは少し興ざめかなア」

「うっさいバカ!!はやくこの魔法解きなさい!ぶっ殺してやるから!!」

「まあ、それはそれとして……」



「でも興味があるのは
キミの能力であって

そのガサツな性格は
ぶっちゃけ邪魔なんだよね…」

うわ
うわ
うわ

ん
ん
ん

「だから……」

「ちょ…!?! な、何すんのよオー!?!」

「そんなトコに…イヤ…!?!…やめ…ッ!?!」

キマッ?



「この…悪シユミ野郎オ……」

（お…お腹が…!!
でも…何かおかしい…

あたしの意識が…
吸われているような…!?)

おっおっおっ
おっおっおっ
おっおっおっ

「流石キャルちゃん、気付いたようだね」

「さっき挿入したのは座薬なんかじゃアない」

「あれはね……」





「キヤルちゃんの『人格』が♡」

「おっと、出てきちゃったね」

「あ……あたし……の……人格……ッ!？」

「そう。さっき挿入したのは体内で、その人物の人格を吸収しゼリー状に変えて排泄させるアイテムだったのさ」

「な……ッ!! じよ、冗談じゃ……ない……わ……」

（何としても……ガマンしない……と……お……いけない……のに……いいいい……♡♡♡）

（何なのこれえええ……♡♡♡
あたし……すごく……排泄……したがってる……うう……♡♡♡）

（ダメ……だめだめだめエエエ……♡♡♡
絶対……耐えて……え♡みせるん……だから……あ……♡♡♡）

「へえ、結構がんばるねえ、でも、これはどおかな?？」





（多量……ちぢぢ……ぞ）

（あた……じ……い……）

オホッ!

アッ...

ズッ

